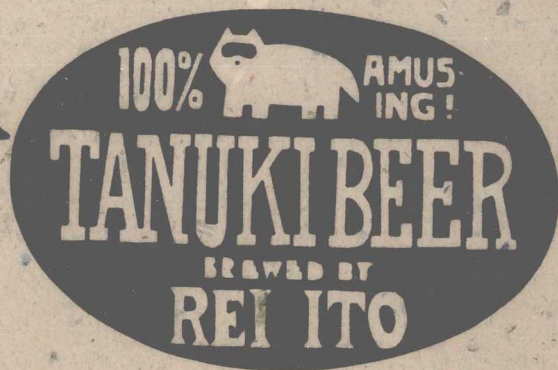


伊藤  
礼



狸  
ビール

狸たぬきビール  
伊藤礼

伊藤礼略歴

1933年東京生れ。一橋大学卒。日本大学教授（英語）。

著書「伊藤整氏奮闘の生涯」、訳書 D・H・ロレンス「チャタレイ夫人の恋人」、C・S・フォリスター「アフリカの女王」、M・ドラブル「針の目」など。

狸たぬきビル

一九九一年五月一日 第一刷発行  
一九九一年十月八日 第二刷発行

著者 伊藤 礼

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二―二／郵便番号一〇二―〇一  
電話

文芸図書第一出版部（〇三）五三九五―三五四

書籍第一販売部（〇三）五三九五―三六二二

書籍製作部（〇三）五三九五―三六一五

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社黒岩大光堂

定価 一五〇〇円（本体一四五六円）



落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部宛  
にお願いたします。

© Rei Ito 1991. Printed in Japan

## 目次

●

狸を食べすぎて身体じゅう狸くさくなって困ったはなし ● 7

猟案内人カナザワクニオさんの命令で大木の股までのぼったこと ● 19

暮れの鉄砲撃ち ● 27

カナザワクニオさんのチビが間違えてメスキジを追い出したこと ● 35

河上徹太郎氏が暖炉のフードに頭をぶつけるはなし ● 43

太陽を背に立つ狩人がすてきだったはなし ● 53

多摩丘陵の小綬鶏たちは元気がいいというはなし ● 61

とつぜん出現した鳥獣保護員につかまらないですんだはなし ● 71

ハラダヨシローが入門し、私が射撃術を指南したこと ● 81

鴨の沖撃ちに行つてハラダヨシローの目玉がゆるんでしまったこと ● 91

ウズラがぜんぜんいなかったはなし ● 101

陣笠をさかまにいらしたのでハラダヨシローの弾が出なかったこと ● 109

ハラダヨシローが本懐をとげたてんまつ ● 119

鳥の脳味噌に弾があたるとどうなるか ● 129

鳥の幸せ——あわせて名犬マツクの活躍 ● 139

三日に一日良い日があること——あわせて遠野狩猟紀行 ● 149

獺チヨッキをめぐる感想 ● 161

製品番号五六八九という銃に関するはなし ● 169

カラスにもうしわけないことをしたはなし ● 179

あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長ながしき追跡のはなし ● 185

心痛む犬たちの思い出 ● 197

男はなぜ敢然と獺に出かけるのか ● 207

チュウがひとの心に感化をおよぼす犬だったこと ● 217

私が獺をやめ、ダンディが天国に行ってしまったこと ● 227

あとがき ● 237

装幀・イラストレーション ● 山口 馨

狸  
ビ  
ー  
ル





狸を食べすぎて身体じゅう狸くさくなって困ったはなし

狸たぬきというのはとても可愛い動物で、可愛さのあまり胸が痛くなるほどだ。ところがそういう狸を剥製にしたりする人間がいる。徳利とくりを持った剥製の狸を、旅館の広間や土産物屋みやげものやの店先で見ると、とんでもないことをする人間がいるものだと思う。許せないと思う。そんなことをするのは極悪非道だと思う。

いまはそう思っているが、二十年ぐらい前、私は狸をつかまえて食べたことがある。岩手の狸だ。まるまるとふとっていて、脂あぶらもよくまわっていた。

狸の食べ方は狩猟案内人カナザワクニオというひとから教わった。まずリンゴを数個オロシでおろす。それにトウガラシとかユズの皮などをミジンにしてまぜる。そのだぶだぶした汁のなかに狸の肉を三時間ぐらい浸す。においをころすためだ。これを鉄板に脂をひ

いて焼く。ジャガイモやキャベツなどもいっしょに焼くとうまい。ただ、そのとき、こげつかないようにヘラで鉄板をひっかいていなければいけない。そうしないとリングの汁のしみこんだ狸の肉は鉄板にへばりついて焦げてしまう。

つかまえたのは六匹だったが、四匹はカナザワさんにあげてしまった。カナザワさんが、あんたには二匹でも食べきれないぐらいだ、と言ったからだ。

肉は一匹で二キロあったから、二匹で四キロになった。私は友達をおおぜい呼び集めて狸パーティーをやった。カナザワさんの言ったとおりだった。パーティーが終ってみんなが帰ったあと、食べきれない肉がずいぶん残っていた。

集まった十人ぐらいの男女はビールを飲みながら、「狸はビールによく合う。うまい、うまい」と言ってよろこんで食べてくれた。みんなが喜んでくれたので私も得意だった。

ところが、そのうちにみんなは、

「なんだか身体じゅう狸くさくなってきたような気がする」と言って、おたがいの身体のおいを嗅ぎはじめた。

「あ、やっぱり狸くさいぞ。たいへんだ、たいへんだ」とみんなは言いはじめた。

狸をたくさん食べてビールを飲んだので、胃袋のなかに狸ビールができてしまい、それが身体じゅうにまわってしまったのだ。

彼らの身体から狸のにおいが完全に抜けるまで二週間ぐらいかかった。私はさいわい鉄板をこするのが忙しくて、彼らほどたくさん食べなかったの、二、三日でもとどおりになった。

いまは、狸を食べたことは悪いことだったと深く後悔しているし、もう狸をつかまえたり食べたりする気はないが、いいわけを言えば、狸をつかまえることになったのはカナザワさんといっしょだったせいだ。私が鳥撃ちだと知っているくせに、カナザワクニオさんが「狸をとろう」と言い出したのだ。

あの日、鉄砲をかついで、カナザワさんと出かけたとき、ほうぼうの山ではもう銃声が出ていた。ところがけのよい鉄砲撃ちはとくに山のなかにいた。はやくしないと先に行ったそういう抜け目ない連中が岩手じゅうの雉をとりつくしてしまいそうな気配だった。私は雉をとろうというところざしはあっても、外が寒いとなかなか寢床から抜け出せないの、いつもこうなってしまう。

空はよく晴れていて、その分だけよい心に心がせいた。

山間の田圃<sup>たんぼ</sup>の農家の横から、雪道を三十分ぐらいのぼって北上盆地を見渡す丘のてっぺんになったとき、カナザワさんのちっぽけな老犬が土手の雪のしたに鼻をつっこんで猛烈に

吠えはじめた。

「狸がいるよ」とカナザワさんは言った。うん、と私はうなずいた。雪のしたの枯れ草のかげにちいさな穴があった。狸の住宅の入口だ。

「狸をとるかい？」とカナザワさんは言った。これは「とりたければとうるか？」という意味のように聞こえるがほんとうはそうではない。もし、そんなふうを考えるひとがいたら、それはカナザワさんを知らないひとであるとかいえない。彼としてはこの狸はぜったいに見逃すべきでなく、これをとらなければご先祖にたいして顔向けができなくなる。

彼の家の納屋<sup>なや</sup>には、先祖代々伝わる、くろずんだ、何百年のあいだに狸の脂が芯の芯まで浸みこんだ、生皮<sup>なまかわ</sup>を張る板が百枚ほどある。もう釘でうってかけぼしにしてある皮も何十枚あった。彼は狸とり猟師なのだ。

犬は雪のなかをかけまわって、またべつのところに鼻をつっこんで吠えはじめた。狸の住宅にはいくつか出口があるようだった。カナザワさんは犬のみつけた出口を全部雪でかくふさいだ。それから私にむかって、「来る途中に農家があったよ。いそいでアシコに行つてスコップを借りてきな」と言った。

カナザワさんはよけいなことは言わないひとだったから、私もよけいなことは言わなかったが、私が金をはらつてカナザワさんを雇ったのだから、そういう用事はかれがするべ

きだと思った。

だが私にも弱点があった。私は親の金であそんでくらしている人間だし、カナザワさんは働いてくらしている人間だ。そういう点から考えれば、三十分の山道をスコップをとりにいってくるのはやはり私のほうかもしれない。カナザワさんには狸が逃げないように番をするという仕事もあるから、これで五分五分のわかれかもしれない。

スコップはうまく借りてくることができた。行く途中、家のひとがいなかったらどうしよう、いてもスコップがなかったらどうしよう、スコップがあっても貸してあげないといわれたらどうしようとか心配したが、結局そんな心配は無用ですぐ貸してくれた。世の中というものは、心配しすぎなくてもなんとかゆくものだということがすこし分かった。

カナザワさんは雪のうえに棒で円をかいて待っていて、私をみるとここを掘れと命令した。こんどもまた、なんだか変な気がしたが、考えていると時間がたって日がくれて、雉もできなくなりそうなので、掘りはじめた。

まず二尺ぐらい積った雪をどけた。それから土を掘りはじめた。思ったより掘りやすい土だった。そのうちにだんだん身体が暑くなってきた。風のない天気の良い日で、場所も南向きの斜面だったからだ。私はジャンパーと猟チョッキとセーターをぬいだ。三尺ぐらい掘ると穴の底に狸家に通じるトンネルが出てきた。ここにはもちろん狸はいなかった。

私はトンネルのまがり角を掘り出ただけだったのだ。そうだとすると私はこれからトンネルの角かどを掘ることになるらしい。

カナザワさんは穴のなかに入って、さっき用意したらしいすぐ細長い木でトンネルの方向と距離をたしかめた。それから、数メートル離れた真っ白な雪のうえにまた円をかいで、また「ここを掘りな」と言った。そこにトンネルの二つ目の曲り角があるらしい。

こんどこそ彼が掘るのがふつうというものだと思いはしたが、くたびれたと言うのもしゃくな気がしたので、掘りはじめた。穴掘りというのはどことなく魂の休まる作業だから、なんだったらもう今日は雉のことは忘れて、一日じゅう穴掘りで過ごしてもいいという気分にもなっていたからだ。そのあたりのことは、カナザワさんにもよく分かっているらしく、私のそういう気分をかれが利用しているのはあきらかだった。私は穴掘りの名人でもケチをつけられないぐらい立派な穴を掘った。

二つ目の穴の底にトンネルが現われるころ、私はとても暑くなってしまい、雪のなかだというのにとうとうシャツ一枚になった。こんども三尺ほど掘ると、穴掘りは完了した。カナザワさんはまた穴にはいってトンネルの行く先をうらなった。この穴のところでもトンネルは方向を変えていたのだ。カナザワさんは長い棒で下水の土管を掃除するみたいにトンネルをしごいて、「こんどはいるよ。たくさんいるよ」と言った。棒の先に狸の感触が

あったらしい。

私は三つめの穴を掘りはじめた。穴掘りにとりかかってからもう二時間ぐらいたって、カナザワさんは「いるよ」と言うのだが私は不安だった。正月の一日に岩手まできて、よその人々は機嫌よく雉を撃っているというのに、私は雪のなかで汗だくになって穴を掘っている。これで狸がいなくてすべておわりとなれば、まったく納得できない一日をすごしたことになる。だが、カナザワさんはちっともそんなことは考えていなかった。なすべきことをなす、それが彼の基本のようだった。

三つめの穴をまたまた三尺ぐらい掘り下げたとき、私の身体がきゅうに落下した。なにがなんだか分からなかったが、気を落ち着けてものごとを分析してみると、どうやら穴の底が抜けて土といっしょに、地下の空洞、つまり狸の住宅のなかに墜落したらしかった。私は腰掛け便所に坐った恰好で、ヘソのところまで土に埋まっていた。

「おっこった！」と私は叫んだ。カナザワさんがやってきて穴の中の私をのぞきこんで、「狸いない？」と言った。私が苦難に瀕<sup>ひん</sup>していることなどちっとも心配しているように見えなかった。手ぐらいひっぱってくれたっていいのにと思ったが、そのとき私は目の前の土のうえに狸の毛が生えているのに気づいた。

「狸はいないけれど毛があるよ」と私は言った。それからその毛をつまみあげようとし